

男女共同参画社会へ向けての啓発誌

しまねの
ひととひと



特集

あなたにとって「転機」とは？ ～男女共同参画の視点で「再出発」を考えよう

- **寄稿** 巻頭エッセイ：いつも、今が、転機のはじまり 2
甲木京子さん(佐賀県立女性センター 女性事業部コーディネーター)
- 講座レポート：転機の可能性としての2007年問題 4
男女共同参画テーマ別入門講座(第1回)
「男女共同参画で“2007年問題”を斬る！～ピンチをチャンスに変える極意」
(講師：竹信三恵子さん)より
- 参考 統計調査：ライフスタイル、高齢男性の就業等に関するデータ 6
- 男女共同参画サポーターにきく！「私にとっての転機・再出発」 7
- 島根県における男女共同参画の現状 9
- インフォメーション 10



あすてらす

特集

あなたにとって「転機」とは？ ～男女共同参画の視点で「再出発」を考えよう

寄稿 巻頭エッセイ

いつも、今が、転機のはじまり

佐賀県立女性センター 女性事業部コーディネーター 甲木 京子

人生はプチ決断の連続だ。メニューで何を選ぶか、出・欠のどちらに丸をつけるか、今日は傘を持っていくべきか。その中で、あとで考えれば大きな転機となる決断をする場面がある。どんな決断であれ、自分にとってよりよい選択をしたいのは人情で、迷ったときほど人の意見を聞き、情報を集めるが、決断とは孤独なものだ。誰もその結果の責任はとってくれない。やり直しもきかない。他人からみればたいしたことでもなく、本人にとっては悩みに悩み、最後は崖っぷちでエイヤ!と何度一人で飛んだことだろう。

決断の一瞬一瞬、今までの経験や知識を総動員する。ときには我ながらなんと愚かな選択だったかと悔い、次回に必勝を期す。そんなあんなを繰り返しながら今の私がいるわけだが、自分の選択の積み重ねで、自分の人生を生きているという実感をもてるのは、あの時の、あの転機があったから。

それは、30代半ば、子育てしながら非常勤の英語の講師をしていたころ。福岡のアメリカンセンターで、米国の女性学者の講演パンフが目にとまった。フルブライトの交換教授として、夫と小さな息子を伴い、6ヶ月の予定で福岡滞在中のシャーロットとの出会いだ。

夜出るのは大変だったが、迷わず行こうと決めた。講演終了後、私としては本当にめずらしく、講師に話し掛け、彼女の大学での講座を受講することにする。やがて彼女の日本女性の聴き取り調査を手伝うことになり、そこで女性問題と出会い、女性運動をしている人たちにもはじめて出会う。さらにナイロビ世界女性会議に連れていかれ、女性センターの設立準備スタッフとなり…。

ちょっとした偶然の重なりのようなのだが、今から考えるとずっと前から準備をしていたような気がする。新しい出会いの数年前、通訳の練習会に参加し始めたばかりだったが、世界女性会議の仕掛け人という女性の講演会の通訳を引き受けたことがある。東京の講演会では、非常に哲学的で難解な話だったので、通訳がうまく行かなかったと聞いていた。講演者と一緒に会場に向かう車中、「私はプロの通訳者でないから(しかも初体験)、わかりやすく話してほしい。」と頼んだ。(これ

は後で同乗していた女性運動のリーダーの方からこっぴどく叱られたが)。

おかげで話は具体的でわかりやすく、参加者にも好評だった。それよりも彼女とは気持ちが通じて快かった。何の話のときだろうか、彼女の問いに、「自分がどこに向かっているのかわからない。」と答えたことをよく覚えている。

女性グループの活動に参加し、女性センターで働くということは、私にとっては単に仕事を変えたという以上の意味があった。ひとつの視点を確保したということ。そしてそれは、同じ視点を共有する仲間がいることで、日々研ぎ澄まされていくということ。一方仕事の中でその視点を生かし、多くの人に気づきと変わるきっかけを提供できるということ。

数年前のことだが、ドメスティック・バイオレンス(以下DV)の講座を受講したことが、自身の夫との関係を変える転機となった女性がいる。講師の私は、パワーとコントロールの車輪の図を使って、いろんな暴力を、具体例を出しながら説明をし、グループワークを行ったが、その日は受講者の反応がとて良かった。講座が終わり、にこにこしながら近



甲木 京子 (かつき・きょうこ) さん

●プロフィール

立教大学英文科卒。九州大学大学院比較社会文化研究院修了(比較社会文化修士)。
大学卒業後、語学学校の英語講師時代に、来日中の米国人女性学者のインタビュー調査を手伝ったことがきっかけで女性問題に関心をもち、1985年ナイロビで開かれた世界女性会議のNGOフォーラムに参加。その後、「ぐるうぶ NO!セクシュアル・ハラスメント」などのNGO活動を続けながら、1987年～1998年福岡市女性センター(現男女共同参画推進センター)調査研究員、2000年～2006年3月福岡県久留米市男女平等推進センター事業コーディネーター、2006年4月～現職に就き事業全般の企画・運営、講師に携わる。

づいてきた彼女は「イヤーいい話をきかせてもらいました。あの車輪の暴力、全部私に当てはまります。」とやけに元気よく言い、はじけたように高らかに笑った。

彼女は話し続けた。ご近所では、いつも一緒に仲のいいご夫婦と見られているそうだが、何かへんだとずっと感じていた。大好きな花を買おうとすると、「家ではあなたが花だから」と止められ、「あなたは飾らなくても美しい」と服も自由に買えない。休日は夫の趣味の釣りに、「あなたが一緒にないとさびしい」と出かけ、川原で丸1日を過ごす。自分の好きなものを買えない、好きなことができない、そんな人生に彼女は不満と夫への疑惑を膨らませていた。

毎年講座に来るたびに、彼女から報告がある。「釣りに付いて行くの止めました。一人で行ってもらってます。」「自分の給料で好きなものは買います。」「念願の海外旅行に、夫と一緒に行きました。」話を聞きながら、年々パワーアップしている彼女と過ごす夫の定年生活も、より豊かになっているのではないかと想像する。

彼女はDV構造を学ぶことで、夫の思うままにコントロールされていた自分の状況に気づき、関係を変えていく働きかけを始めた。気づきと学びが彼女を後押ししたのは間違いのない。誤解がないよう付け加えるが、DV被害者が加害者を変えることはほぼ不可能だ。ルールを決めるのは常に加害者で、暴力と恐怖でそれに従わせることがDV構造だからだ。

彼女の場合、夫は穏やかな人柄だったので交渉が可能だったともいえる。また、このケースは、どんな夫婦関係にも、DVの要素が混入している可能性があることを示唆しているともいえる。夫が定年に近づいていたこと、彼女が働き始め、稼ぎ始めていたことなどで、関係を変える下準備が整っていたともいえる。

彼女も私も50代の後半。この年代は、仕事ばかりでなく、私的な人間関係でも転機を迎える時期だと思う。団塊世代の大量退職に伴い、今までの経験を生かし、時間がなくてできなかったこと、新しいことにチャレンジする人たちが注目を集めている。地域デビューする人、起業やNPO活動をはじめの人、外国で暮らし始める人…。

リスクを伴う転機をうまく乗り切れるかどうか。それは今までどう生きてきたかが試されるだろうし、いろんな役割から自由になれるこの時期だからこそ、より平等で自由な人間関係をつくっていけるかどうかにもかかっている。

長いあいだ音信不通になっていたシャーロットに、インターネットで検索してEメールを出した。翌日、今は人生最悪の時期という彼女の返信があった。一人息子が先週自死したという。白人でありながら、イスラム教の研究者で聖職者になり、米国のイスラム系コミュニティと活動を共にしていた彼は、9.11後のアメリカの迷走に巻き込まれ、人生を大きく狂わせていたらしい。

メールのやり取りをしながら、あらためて彼女の強さを再認識した。このあまりにも辛い、が誰にでも起こり得る出来事を、彼女は今後どう理解し、受け入れていくのだろう。否応なく新たな転機を迎えざるをえない彼女と、久しぶりの再会を期している。



～ 男女共同参画テーマ別入門講座(第1回)

「男女共同参画で“2007年問題”を斬る!～ピンチをチャンスに変える極意」 (講師:竹信三恵子さん) より～

「2007年は転機の年!？」

9月16日(日)に開催された「男女共同参画テーマ別入門講座(第1回)」では、朝日新聞編集委員の竹信三恵子さんを講師に迎え、“2007年問題”をテーマにお話しいただきました。竹信さんの明解な説明からは、「2007年問題を考えることは、日本社会全体にとっても、そこで生きる私たち一人ひとり(=個人)にとっても、従来のやり方を改め男女共同参画型のものへと変えていく契機になりうる。」ということが伝わってきました。

その内容を、今回の特集テーマである「男女共同参画への転機」という視点で紹介します。

文責:(財)しまね女性センター(小川洋子)



講座での竹信三恵子さん

竹信 三恵子さんプロフィール

経済部記者、シンガポール特派員、学芸部家庭面デスク、総合研究センター主任研究員などをへて、2007年4月から編集委員(労働・ジェンダー担当)。1999年11月から2002年7月まで、朝日新聞社系CSテレビ局「朝日ニュースター」の解説委員を兼務。2005年9月まで内閣府男女共同参画会議専門委員。1980年代、少子化の背景にある女性の雇用環境の未整備を報道して女性の立場からの少子化の原因分析に先鞭をつけたほか、パートタイマーの均等待遇やワークシェアリングなど、暮らしと労働の接点にある問題を多数手がける。主著に『日本株式会社的女たち』(1994、朝日新聞社)、『女の人生選び』(1999、はまの出版)、『ワークシェアリングの実像～雇用の分配か、分断か』(2002、岩波書店)。共著に『家事の値段』とは何か(1999、岩波ブックレット)など多数。



要点

2007年問題とは ～男女共同参画の視点で読み解くと・・・

- 2007年は団塊世代の男性がそろそろ定年退職になり始める年。団塊世代とは、戦後の日本で「男は仕事、女は家庭」という性別分業体制を確立させつつ、社会全体としては高度成長を成し遂げ、個人的にも(夫の右肩上がりな昇給・昇進によって)成功してきた人たちのこと。この、「男は仕事、女は家庭」の性別分業は、成功イメージと結びついている上に、社会全体に多大な影響力を持つ団塊世代中心に作られてきたため、いまだにライフスタイルの基本の形となっている。2007年問題とは、そうした世代が第一線を退くことによって社会全体にどのような影響が出てくるのかを総合的にさす。
- 他方、団塊より少し後の世代に目を移すと、1970年代半ばの高度成長期の終わり以降、性別分業体制を見直す動きが出てくるようになった。それは、国際婦人年(1975年)を契機に、性別分業が女性の社会進出を妨げ男女の不平等を助長するという理念的な主張によるところもあるが、そもそも社会背景として性別分業システムが機能しなくなるような経済上の大変化が1970年代半ばに起こったからという、物理的な理由の方が大きい。つまり、高度成長が終わったために、男性が働けば働くほど収入が増えることがなくなり、男性の収入だけで家族全員の生活を維持する「企業戦士の夫と専業主婦の妻」(男は仕事、女は家庭)の基盤が一般的には危うくなったという変化のことだ。この変化に対応して生活を維持するためには、女性も労働市場に参入するということと、男性も家庭(家事・育児・介護)に参画するという互いの歩み寄りが必要になってくる。
- いわば、日本における男女共同参画の取組は、かつての性別分業システムのままではどうにもならない、見直した方が良いという、1970年代から見えていた課題への対応策と見ることもできる。そして、2007年とは、こうした課題は見えつつも何とか維持してきた性別分業へのこだわりの強い団塊世代(の男性)が大量退職することによって、社会全体の意識という面でも、労働力の激減という物理的な面でも、大きな転換期となる可能性がある。

2007年と私たち ~企業・地域・家庭はこう変わる!?

どんな課題が出てくるか

- 企業... 引退していく団塊男性に代わる労働力として、女性、高齢男性(再雇用者)、外国人の活用がうまくいかないと、労働力不足の危機に陥る。
- 地域... 引退後、地域に戻ってくる団塊男性。会社と地域活動とでは、意志決定やコミュニケーション等の方法が異なるが、どう活動に参入してもらうか。
- 家庭... 引退後も性別分業意識を持ち続けて家で暇を持て余す団塊男性と、そうした姿に不満やストレスを感じる妻。年金分割制度も始まるため、離婚の危機に!?

キーワードは「男女共同参画」

どう対処していくか

- 企業... 仕事一辺倒とはいかない女性、高齢男性(再雇用者)、外国人の参入に対応するため、仕事も家庭(私生活)も両立できる「ワーク・ライフ・バランス」型に職場環境を整える。
- 地域... 上位下達の決定や性差別的コミュニケーションは退けるが、受け入れる側も、本当に実力・やる気のある人が男女問わず活躍できるような、透明性のあるルールづくりをする。
- 家庭... 引退後は男性にも家事をやってもらう。(※詳細は下記の「極意5」参照)
団塊より若い世代も、企業の両立対応策とセットで、家事・育児・介護の男女共同参画を。

2007年問題への対処の極意 ~自分を楽にするためのヒント (抜粋)

- 1 何になりたいのかと何ができるのかを率直に見つめよう→リセット型から雪だるま型へ
なりたい自分になる一歩を踏み出すために、「未来年表」を作る。例えば、5年後の自分がこうありたいと決めたら、そのために3年後までにはこれを実現、1年後までにはこれをする...と逆算的に計画を立て、では明日から何をする、という具合に行動に移す。また、行動する際には、うまくできなかった昔の自分を嫌うの(リセット型)でなく、これまでやってきた事の中で良いエッセンスを取り出してそれを膨らませていく方法(雪だるま型)で。
- 2 なりたいものになっている人たちとの出会いの場を広く多く作ろう
これまでの自分の良い点をのばすためにも、モデルになれる人たちにたくさん出会って交流する。
- 3 勝ち癖をつけよう
子どもの頃から「あんなことをしてはいけない」、「他人様の笑い者にならないように」と言われ続けると、「こうならないように振る舞おう」と負け癖が身に付くもの。そうではなく、小さな事からでも「やってみれば何かできるかもしれない」とプラス発想に転換を。
- 4 自立イメージを変えよう
自立とは、他人に頼らないことではない。助けが必要な時に、適切な人を探す能力があり、「助けて」と言える力のこと。この能力を身につけることで、できる仕事の規模・範囲が倍増する。
- 5 仕事はマネージして分散しよう
例えば、家事の分散。これまで家事を一手に引き受けていた人は、まずは手に余る分量の家事を家族にやってもらうことから始める。そのために、家事の透明化・システム化を図り、初めての人でも参入しやすい工夫をする。また、任せた事には口出し・手出しはしない。これから家事に参画する人は、得意なことから限定的に始めてみよう。

言葉だけは広まった「2007年問題」ですが、今回、竹信さんの解説を聞き、改めて気づいたことが2点ありました。

①2007年問題は団塊世代だけの問題ではない!

団塊世代との関わりで耳にすることが多かったせいか、この問題を社会全体の問題として捉える視点が抜けていたように思います。2007年問題を受けて、社会全体をどうするか、そのために団塊以外の世代も含め、私たち一人ひとりがどう行動していくか、まさに考え直す「転機」となりました。

②2007年問題は2007年だけの問題ではない!

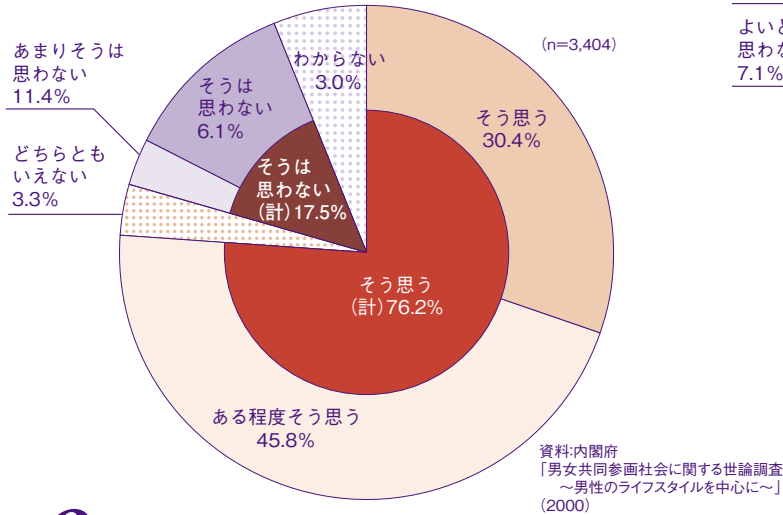
つい2007年前後にばかり目を奪われがちですが、始まりが既に1970年代にあったとは...。30年以上経って、本当に今が性別分業体制のギリギリのところ。2007年は男女共同参画への転換の正念場なのです

レポート
後記

ライフスタイル、高年齢男性の就業等に関するデータ

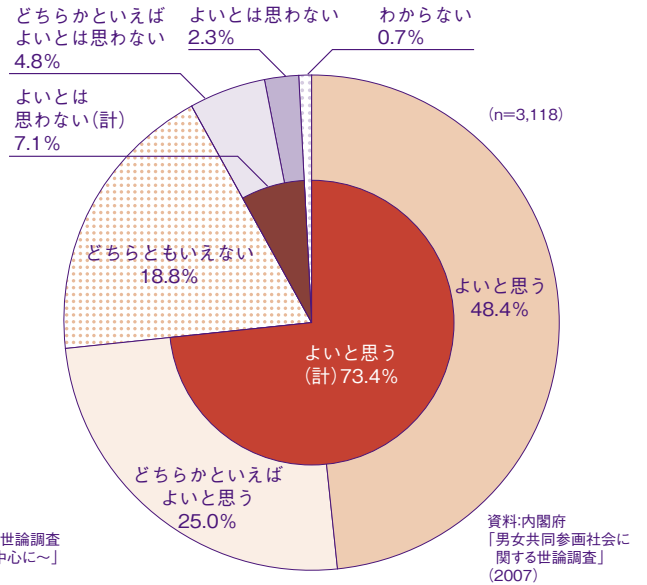
1 男性がライフスタイルを変えることについて

「今後、男性が子育てや教育などに参画して、家庭生活を充実し、家庭と仕事の両立を図るためには、これまでの企業や仕事中心のライフスタイルを変える方がが良い」という考え方について

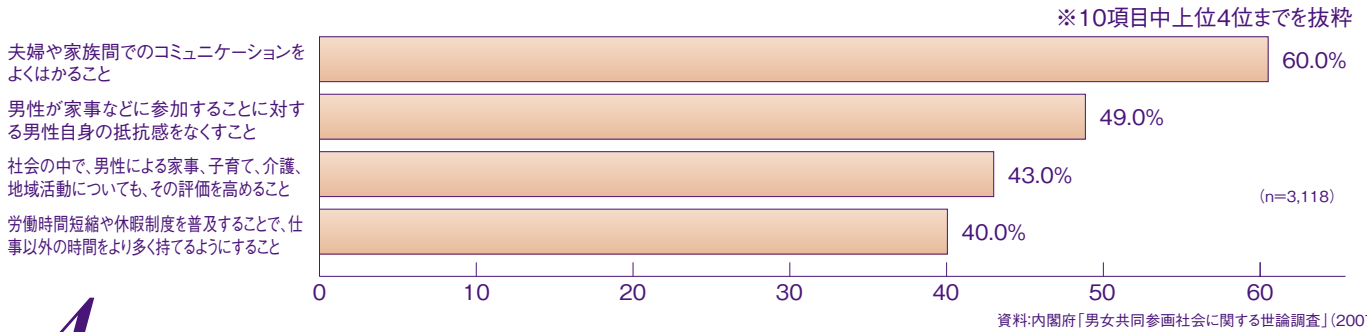


2 女性の社会進出について

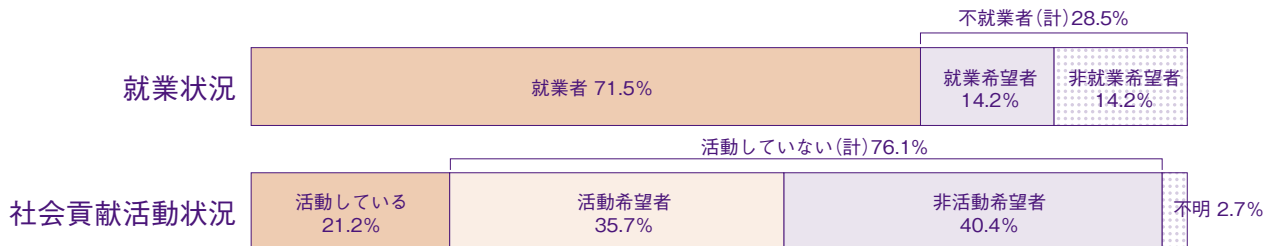
「今後、もっと様々な職業分野で女性が増えるとよいと思うか、よいとは思わないか」



3 男性の家事、子育て、介護、地域活動への参加に必要なこと



4 高年齢男性の就業、社会貢献活動の状況



注 1)55歳以上69歳までの高年齢男性 2)就業者:2004年9月中に収入になる仕事をした者

資料:厚生労働省「平成16年高齢者就業実態調査」(2004)

国の「男女共同参画社会に関する世論調査」(2000,2007)によると、男性の仕事中心のライフスタイルを変えること、女性の職業分野への進出ともに賛成する人の割合が7割を超えています。そして、男性の家庭・地域参画のためには、「夫婦・家族間のコミュニケーション」に次いで、本人や周囲の意識や評価の変更、職場環境の転換を望む声が上位に挙がっています。

また、高齢で仕事をしている男性が多く、社会貢献活動も希望を含めると活動の可能性が高いという調査結果からは、高齢期での就労や社会活動の環境を整えることが必要といえます。

男女共同参画サポーターにきく! 「私にとっての転機・再出発」

転機とは、前の自分をゼロに戻すことではなく、
良い要素を加えていくこと

奥出雲町 田部隆義 (たなべ・たかよし)さん

島根県男女共同参画サポーターとして、また、奥出雲町男女共同参画推進懇話会の会長として、男女共同参画の地域づくりに尽力している田部隆義さん。もともと人権・同和問題に長く携わってきたことが、男女共同参画分野への活動の土台となっているようです。

(H19.11.8 取材：勵しまね女性センター 小川洋子)



— 人権・同和問題については、島根県の啓発指導員をされるなど長く取り組んでおられるそうですね。

私は、もともとは中学校の教員だったのです。人権・同和問題に取り組むようになった最初のきっかけは、40歳の時に先輩教員の方から「社会教育をやってみないか。」と声をかけてもらったことです。「いずれ、学校に戻った時にもこの経験が役に立つから。」と背中を押してもらい、特段抵抗感もなく、社会教育主事の資格を取って翌年学校現場を離れました。以後5年間で、県から市町村へ派遣される社会教育主事として、旧八雲村、旧横田町、旧仁多町に赴き、家庭教育学級、婦人学級、高齢者学級等を担当したのですが、そのカリキュラムの中に同和問題も含まれていました。それが同和問題との出会いだとすると、この問題に直接向き合うようになったのは、次の異動で県の同和教育課へ移ってからだと思います。ここで3年間、社会同和教育部門において同和問題の教育・啓発等に取り組み、続いて一度(2年間)学校現場に戻ったものの、再び同和教育課に異動してさらに3年間この問題に取り組みました。その後は、定年退職するまで6年間小学校・中学校へ戻ったのですが、退職後、今度は県の同和对策課で非常勤の人権・同和問題啓発指導員として勤めることになり、こちらで7年間お世話になりました。

こうやって振り返ると、40歳で社会教育に携わるようになったことが、長く人権・同和問題に取り組む続けるための転機といえは転機なのでしょうが、初めから気負ってこの問題に取り組む始めたわけではありませんし、転機と言っても一度自分をゼロに戻して…というイメージではないですね。それよりも、少しずつ学習を積み重ね、同和地区の方々とも交流するうちに、「やはり、同和問題は何を置いても人権の最重要課題、本気で向き合って解決しないと。」という思いが強くなっていった結果、今まで長く取り組み続けているのだと思います。

— 男女共同参画への取組は、どのようなきっかけがあったのですか。

直接のきっかけは、県の男女共同参画サポーターとして私より先任の吉川しのぶさんが、3年前に、旧仁多町で男女共同参画推進懇話会を立ち上げられ、その際に誘ってもらったことです。同和問題が人権に関わる問題であると同様、男女共同参画も根っこは同じ人権の問題ですから、何か新しい分野の問題に取りかかるというのではなく、ごく自然に「男女共同参画も人権問題として着実に進めていかなければ。」という思いで、仲間に加えていただきました。自分自身、普段から家事などは夫婦で協力し合ってやるものと考え、実践を心がけていたので、そういう面でも違和感がなかったのかもしれない。

この縁で、翌年からは私も男女共同参画サポーターをお受けすることになりましたし、仁多町と横田町との合併で一時中断していた懇話会も、新たに奥出雲町男女共同参画推進懇話会としてスタートしましたから、この会の活動を核にして、男女共同参画の地域づくりに向け一層取り組んでいきたいと思っています。

— 今後は、どんなことに取り組んでみたいと思われませんか。

やはり、私にとっての転機・再出発というのは、毎回自分をリセットするのではなく、今の自分を大切に、これまでの経験を踏まえた上で、良い出会いや経験をさらにプラスしていくもの。ですから、これまでと全く違う何かに挑戦するのではなく、今取り組んでいる活動をしっかり継続して広げていきたいと思っています。

男女共同参画の活動に携わるようになって、これまでにいくつかの発見もありました。例えば、地元での活動が中心ですから、以前のような県レベルでの取組では気づきにくかった地域の身近な問題を実感できます。だからこそその気づきも多く、男女共同参画社会は男性の方こそしっかり考えて変わらなければ実現できない、と強く思うようになりました。そのためにも、今後は思いを共有できるような仲間づくりにも力を注いでいきたいです。



ただいま人生第4期!男女共同参画の 地域づくりにますます張り切っています

松江市 犬山春江 (いぬやま・はるえ)さん

咸興(現ハムフン)でスタートした教員生活、終戦を経て日本に帰国してからも教員として定年まで勤め上げ、その後旧宍道町議に転身して5期18年。合併に伴い議員を辞職してからも、様々な活動に忙しく、なかなか悠々自適とはいかない犬山春江さんにお話をうかがいました。

(H19.10.30取材：(財)しまね女性センター 小川洋子)



— 男女共同参画との関わりでは、旧宍道町議として尽力されていた印象が強いですが、教員をされていたのですね。

ソウルで師範学校を卒業し、18歳で教員になりました。終戦で、島根に引き揚げたことは人生の中で大転換ですが、ありがたいことに島根でも教員資格を取得し、教員として新たに出発できました。勉強しながら、どう指導に当たるかの努力と緊張の日々に生き甲斐を感じ、結婚や出産で辞めようと思ったことはありませんし、家族も理解してくれました。学校というところは、女性も男性も責任や待遇が基本的に平等ですので、性差別とか男女平等の問題をことさらに意識することはありませんでしたね。

ただ、当時は、夫がいる女性教員の早期退職が慣例になっていて、私も45歳の時に初めて退職勧奨を受けました。この時、「なぜ、女性だけにこういう慣例があるんだろう?」と疑問に思ったのが、私と男女共同参画との出会いだったように思います。幸いなことに、教育への情熱を信念を持って伝え続けたところ、理解してもらえ、結果的に55歳の定年まで教員を全うできてありがたいと思っています。その後も、助教諭として6年間教壇に立ち続けました。

— そして、町議選に出馬されたのですね。

教員を辞めてすぐに町議を目指そうと思ったわけではありません。退職後は、それまで忙しくてあまり参加できなかった婦人会活動を熱心にするようになったのですが、活動を通じて、診療所通いをする高齢者にとって交通が不便であったり、福祉施設やサービスが不十分なこと、子どもの通学の問題、上下水道の未整備など、初めて自分の地域の問題が見えるようになってきました。また、当時の婦人会は、国連婦人年(1975)やそれに続く「国連婦人の10年」の影響で、女性問題(今で言えば男女共同参画)についての勉強会なども活発でしたので、宍道町でも「女性を議会に!」という気運が高まり

つつありました。婦人会では、最初若い世代に期待して声をかけたのですが、家庭で反対されるなどして出る方がなかなか決まりません。このまま誰も出なければ、また4年後の選挙まで女性の声が届かず、せっかくの婦人会の問題提起も議会で取り上げられるチャンスがなくなってしまいます。そこで、夫に相談し賛同してもらったこともあり、自ら出馬することにしたのです。

選挙活動中は、やはり「女のくせに!」という感じで露骨に妨害されたりもしましたが、地道に誰もが住みやすい町づくりを訴え続けたおかげで当選を果たすことができました。5期のうち3回もトップで出していたが、女性でありながら副議長・議長職も果たすことができたのは、女性議員が待ち望まれ、女性としての経験を活かして生活に密着した地域課題に取り組み、着実に政策に反映してきた事が評価してもらえたからではないでしょうか。

また、議員として政策決定の場への女性参画を自ら体現する立場であるわけですから、男女共同参画の施策自体にも積極的に取り組んだつもりです。その後、旧宍道町では町議15人中4人が女性となり、女性議員の多さから「男は仕事、女は家庭」と性別役割分担意識の強い他市町村の人から揶揄の声も聞こえてきましたが、私は、男性を含め宍道町の人たちには先進的に男女共同参画への理解があったからだと思っております。

— 議員を退いてからも、積極的に男女共同参画に取り組まれていますね。

帰国するまでの乙女時代が第1期、日本での教員生活を第2期、議員時代を第3期とすると、今は人生の中で第4期とも言えます。純粹に一人の住民の立場になってみて、やりたいこと・やらなければならないことが改めて見えてきたと思います。

男女共同参画についても道半ばですが、最近は男女共同参画という言葉自体は知られるようになり、そのせいか、婦人会で熱心に勉強していた頃に比べ、逆に活動の中身がマンネリ化している気がします。本当の意味で、一人ひとりが男女共同参画の意識を持つためには、男性も女性も若い人から高齢の人までが交流しながら、楽しく様々な手法を用いてこの問題にアプローチしていかなければならないと思います。市町村合併で解散した、旧宍道町の男女共同参画懇話会に代わり、民間で立ち上げた「しんじたんぼの会」もその試みの一つ。いくつになっても、情熱を燃やし目標を持って前向きに生きたいものですね。



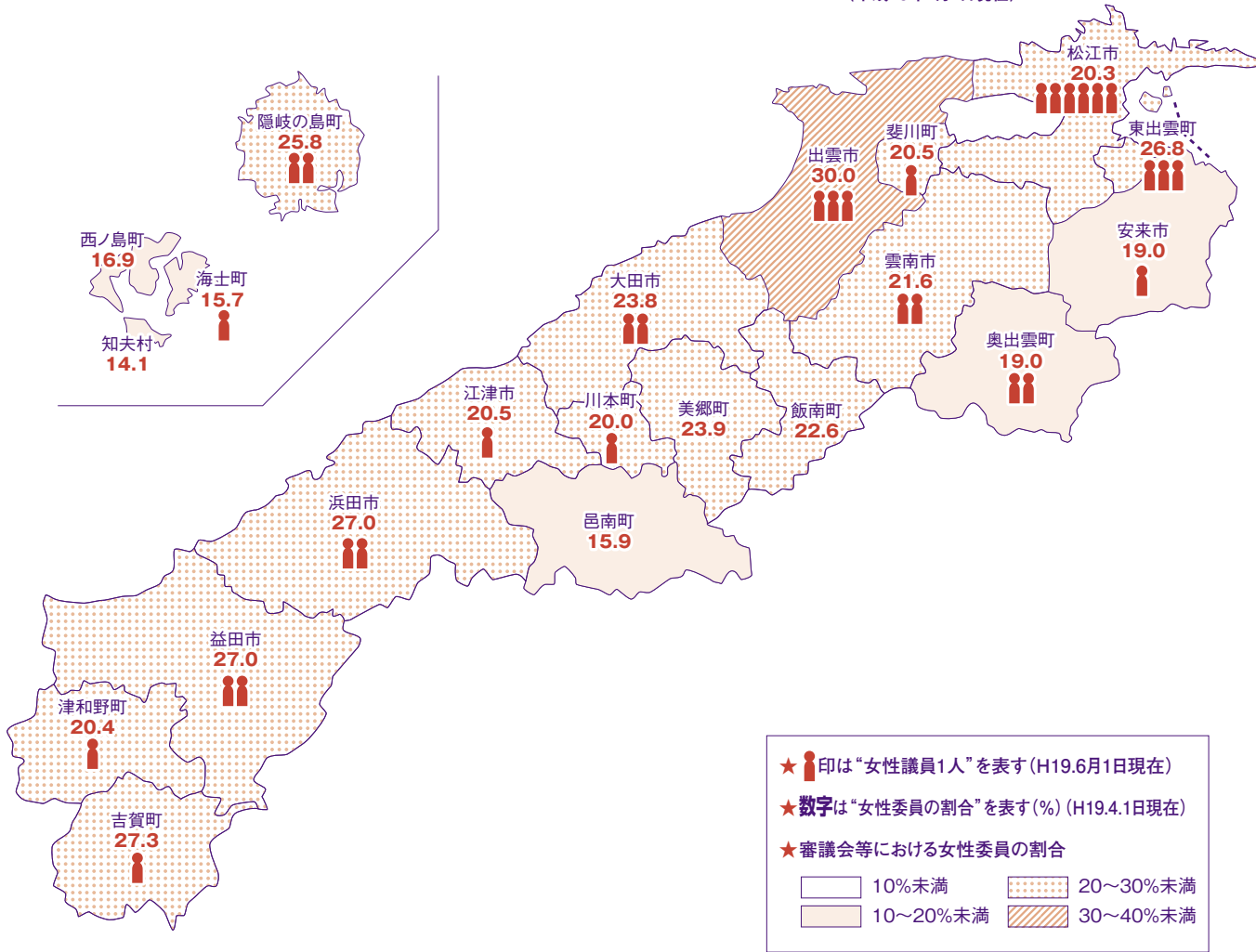
旧宍道町議時代に
取り組んだ
男女共同参画のためのプラン

島根県における男女共同参画の現状

県内の政策・方針決定過程における女性の参画状況

●女性議員・審議会等女性委員MAP

- ◎市町村議会議員 **6.5%** (議員総数464人中女性30人)
(平成19年6月1日現在)
- ◎市町村の審議会等委員 **23.0%** (委員総数7,229人中女性1,661人)
(平成19年4月1日現在)



★印は“女性議員1人”を表す(H19.6月1日現在)
 ★数字は“女性委員の割合”を表す(H19.4.1日現在)
 ★審議会等における女性委員の割合
 □ 10%未満 □ 20~30%未満
 □ 10~20%未満 □ 30~40%未満

●国、県の審議会等における女性委員の割合の推移

調査年月	H14	H15	H16	H17	H18	H19
県の審議会等	21.0	29.2	36.8	38.5	41.9	42.5
国の審議会等	25.0	26.8	28.2	30.9	31.3	32.3

※H14の県は3月、H15~19の県は4月、国は全て9月のデータ

●女性議員の割合

調査年月	H15		H16		H17		H18		H19
	島根県(6月)	全国(12月)	島根県(4月)	全国(12月)	島根県(5月)	全国(12月)	島根県(4月)	全国(12月)	島根県(6月)
都道府県議会	0.0	6.9	0.0	6.9	0.0	7.2	0.0	7.3	5.4
市議会	7.6	11.9	8.1	11.5	7.5	10.6	7.0	10.8	6.7
町村議会	5.9	5.6	5.9	5.8	5.8	6.4	6.6	6.9	6.1
市区町村議会	6.3	7.9	6.4	8.1	6.6	8.9	6.8	9.5	6.5

INFORMATION

男女共同参画パフォーマンスステージ 入賞作品介绍 ～“わたしの気づき”が未来への大きな一歩です～

男女…共同…参画…なんだか難しそうだなあ。
私にはあまり関係のないことじゃないかな。

「男女共同参画」についてこんな会話を聞いたことはありませんか。
実は性別にとらわれず、私たち一人ひとりを大切にすることから始まって、
日常の暮らしの中にあるいろんなことに関わっていることなんです。



島根県では県民のみなさんが男女共同参画の意義や必要性に関する理解を深め、日常生活においてその推進が図られることを目的として、寸劇、紙芝居、朗読の3部門を設け、男女共同参画をテーマとした作品募集を行いました。
応募作品の中から選ばれた入賞作品は、団体のみなさんが創意工夫をこらした内容となっています。

シナリオ賞

部 門：寸劇
受賞者：横並びの会
作品タイトル：" ちゃんぼし かわらいや ～自治会への提言～ "

演技賞

部 門：寸劇
受賞者：劇団「アクアス姫」
作品タイトル：" 夫婦でカンパイ！～夢開くワーク・ライフ・バランス～ "

アイデア賞

部 門：紙芝居
受賞者：しまね女性塾2001
作品タイトル：男女共同参画啓発紙芝居
「子ども時代からのパートナーシップ…いっしょにやろうよ…」

また、入賞作品は、地域においての男女共同参画に関する学習・研修に活用していただけるよう映像化(DVD)する予定です。

開催します!

男女共同参画レベルアップ講座～広報紙(広報記事)作成講座

あすてらすでは、男女共同参画の様々な活動のリーダーとして、実践力をつける講座を毎年開催しています。今年度は、男女共同参画に関する啓発・広報能力、情報発信能力の育成を目指す講座です。詳しいご案内はまもなく!皆さまの参加をお待ちしています。

日 程

平成20年2月2日(土)・3日(日)、3月8日(土)・9日(日)
(※開催時間は調整中です)

講 師

はますな けい こ
濱砂圭子さん
(株)フラウ代表取締役、地域密着型情報誌「子づれ DE CHA・CHA・CHA」編集長

内 容

男女共同参画の視点をもった広報紙・広報記事作成の心構え、取材・インタビューのノウハウ
紙面作り・デザインのノウハウ、記事・原稿の書き方、校正のノウハウ など

平成20年度前期(当初)「公益信託しまね女性ファンド」助成事業募集!!

『しまね女性ファンド』はいきいきと活躍する女性を応援します!

この助成金制度は、女性が持てる力を十分に発揮して地域でいきいきと活躍していただくために設けられた「女性」にスポットをあてた全国初のファンドで、県内の女性を中心とする民間の団体やグループが行う活動に対し助成を行っています。

①対象となる団体

島根県内の女性を中心に活動している民間の団体やグループ(構成員がおおむね10名以上、うち女性が半数以上)

②対象となる活動

- ・島根県の女性が自主的・主体的に企画実施する活動
- ・一般に開放されている事業

③対象事業

1 魅力ある地域づくりの活動

女性が男性とともに、地域の担い手としてその感性と能力を生かして行う「魅力ある地域づくり」を推進する活動を応援します。

2 男女共同参画社会づくりの活動

様々な分野に女性と男性が共に参画していく、豊かで住み良い社会を築きあげていくための「男女共同参画社会づくり」を推進する活動を応援します。
また、民間シェルターの開設・運営を応援します。(助成基準が若干違いますので、事務局までお問い合わせください。)

3 次代を担う人づくりの活動

子どもたちの健康と豊かな人間性を育むための「次代を担う人づくり」を推進する活動を応援します。

4 水と緑豊かな環境づくりの活動

私たちが暮らす島根の豊かな自然環境を守り、自然と共存していくための「水と緑豊かな環境づくり」を推進する活動を応援します。

④助成内容

- ・対象経費の3分の2を助成(1万円単位で上限50万円)
- ・男女共同参画社会づくりの普及・啓発活動に対しては、対象経費を全額助成(1万円単位で上限10万円)

募集期間

平成19年12月1日～
平成20年1月31日
(当日消印有効)

事業の実施期間

平成20年4月1日～
平成21年3月31日

申請方法

所定の助成申込書と必要書類を添付の上、下記へ送付または、お持ちください。

お申込み・お問い合わせ・ご相談

公益信託
しまね女性ファンド事務局
(財団法人しまね女性センター内)
〒694-0064
大田市大田町大田イ236番地4
TEL 0854-84-5514
FAX 0854-84-5589

平成19年度前期(当初)助成事業の一例

	事業名	団体名	事業概要
地域 魅力 ある づくり	もったいない・里みちこの詩がたり会	ふるさとの宝・古民家を活用する会	隠岐の島町にある古民家に、詩人の里みちこさんを迎え「もったいない」から生まれる詩を語ってもらい、古いものを大切にすることを育むための会を開催した。
	ちぎり絵サークル花麦25周年作品展	ちぎり絵サークル花麦	サークル発足25周年記念として、会員の作品、全国ちぎり絵サークル創始者及び現主催者等の特別展や、ワークショップ(ちぎり絵体験コーナー)を開催した。
社会 男女 共同 参画	女性の為のワンステップサロン	まみーず カフェ	女性の「生き方」をサポートすることを目的に、県内外から講師を迎えワンステップセミナーを開催した。
	ひとりひとりが輝くまちへ (あなたとわたしがつなぐ手と手)	川本町地域婦人会	「身近な男女共同参画」をテーマに、気軽に参加できる寸劇と講師自身の体験談を交えた講演会を開催し、その内容から来場者と本音で語る意見交換会を実施した。
	男女共同参画セミナーinごうつ	江津市男女共同参画研究会	「少子高齢化」をテーマに、男女共同参画社会の実現に向けた講演会を開催し、誰もが暮らしやすい、いきいきと輝いて暮らせる地域づくりと意識啓発を深めた。
人 次代 を 担う	能を楽習する集いin隠岐の島町	旬の会	次代を担う隠岐の子どもたちや地域住民の方とともに、本物の古典芸能を体験する「能を楽習する集い」を開催した。
	たかはしべんコンサート	浜田のまちの縁側	子どもたちの感受性を育てるひとつの手段として、暖かいメッセージソングを歌うプロ歌手のライブコンサートを開催し、子育て中の親や家族、地域住民との交流を図った。
水と 緑 豊 かな 環境 づくり	花と緑で交流の輪とまちづくり	FGC(花と緑のクラブ)	地域に花や緑を増やし潤いと安らぎのあるまちづくりをめざす。気軽に楽しめる寄せ植えの作り方やハーブのプランター講習会を開催し、地域から活動の輪を広げていく。



日本女性会議2007ひろしま

標記会議が10月19・20日の両日に渡って開催され、参加してきました。性別に関わらず個性や能力を発揮できる社会を作ろうと、全国から3,500人が参加し、議論と交流を深めました。このうち男性は1割いたでしょうか。

今大会のテーマは「一人ひとり響きあっていまそして未来へ」。初日は、「子育て支援」や「女性と政治参画」など16もの分科会があり、私は第13分科会「食育」に参加しました。「食育のすすめ～大切なものを失った日本人～」をテーマとするこの分科会には、約500人の参加者があり、服部栄養専門学校理事長・校長でテレビでもおなじみの服部幸應さんが、基調講演をされました。それによると、現在、日本は食に関する様々な問題に直面しているそうです。例えば、生活習慣病が増え、食べ物が死亡原因の約65%を占めるまでになっていること、また、60%の食べ物を輸入しながら、その3分の1を捨てていることなど、あまりにも食糧事情に無関心で嘆かわしい現実です。そうした中、この頃は「食育」が注目されていて、学校での「食育」の学習はもちろん、家庭での実践が大切と話され、①選食力を養う、②食事作法を身につける、③地球の食を考えてみる、の3点が強調されました。そのための第一歩は、家庭で食卓を囲み、家族が同じ食べ物を摂ることですが、最近はその夕食を食べる家庭は3割しかいないそうで、すぐにも家庭での実践を始めなければならないと思いました。(これを読まれた方も、ぜひその日から実践してみてください。)また、講演後

のシンポジウムでは、3人のシンポジストが「世代別の食育」、「企業から見た食育」、「地域食育」について発表されました。

20日は全体会で、2会場に分かれての開催でしたが、私が参加した会場では、シンポジウム「男女共同参画を超えて～男女平等・多様性が受け入れられる社会づくりをめざす～」や、内閣府男女共同参画局長の板東久美子さんによる基調報告「男女共同参画の今、そして未来」に続き、女優の吉行和子さんの記念講演「私の歩んできた道」がありました。

そして、会議は「ひろしま大会宣言」の採択で締めくくられました。一部抜粋して紹介したいと思います。「私たちは 真の男女共同参画の実現に向けて 力を出し合い行動する勇気 を分かち合いました 響き合う出会いから生まれた信頼を地域に持ち帰り 明日からまたねばり強く 活動していきます」

最後になりましたが、この会議に参加させていただいたことに感謝し、自分の活動に活かしていきたいと思ひます。

島根県男女共同参画サポーター(出雲市)
池田晴久



閉会セレモニーでの大会宣言

あすてらすからのお知らせ

平成19年度 女性に対する暴力をなくす運動記念事業 ドメスティック・バイオレンスに関する公開講座

「ドメスティック・バイオレンス(DV)の被害者と DVにさらされた子どもへの支援のために」

●とき/平成19年12月16日(日)13:00~15:00

●ところ/県立男女共同参画センター あすてらす

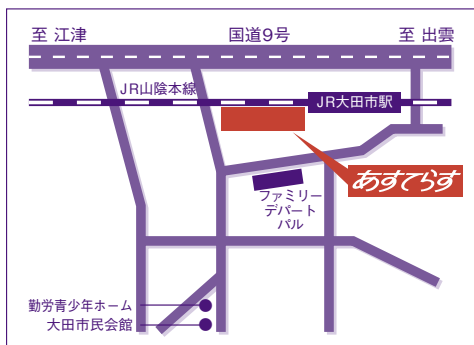
講師 加茂 登志子さん

(東京女子医科大学附属女性生涯健康センター所長、精神科医)

参加料 無料

(JR大田市駅西隣)

定員 90名◎託児も行います(要予約)



島根県立男女共同参画センター

あすてらす

〒694-0064 大田市大田町大田イ236-4 (JR大田市駅西隣)

TEL 0854-84-5500(代) FAX 0854-84-5589

ホームページアドレス <http://www.asuterasu.pref.shimane.jp/>

利用のご案内 ((誰でも気軽に利用できます!))

●開館時間/9:00~19:00(貸出し施設については21:00まで)

●休館日/毎週月曜日・国民の祝日・年末年始(12月29日~1月3日)